

平成 30 年度おきぎんふるさと振興基金事業報告書

芭蕉布原産地の現状に関するシンポジウムの開催

芭蕉布勉強会 野村 陽子

1 「芭蕉布の科学」 イベントの概要

平成 30 年 8 月 27 日から 9 月 22 日に沖縄科学技術大学院大学 (OIST) にて、「芭蕉布の科学」という芭蕉布に関連するイベントを開催した(図 1 左)。このイベントには、協賛：おきぎんふるさと振興基金、JAL、JTA、協力：沖縄県立博物館・美術館、喜如嘉芭蕉布事業協同組合、後援：沖縄県、OIST 発展促進県民会議、大宜味村のご支援をいただいた。ここでは、芭蕉布の美しさだけでなく、全く新しい方向、すなわち芭蕉布についての科学的知見について発表した。おきぎんふるさと振興基金は後述するシンポジウムだけではなく、このイベントの展示パネル(日英両語の解説付き、次ページ参照)、チラシ・ポスター(図 1 左)作製などにも使わせていただいた。来場者は合計で 1283 名と、沖縄県内外から多数の方にお越しいたいただいた。

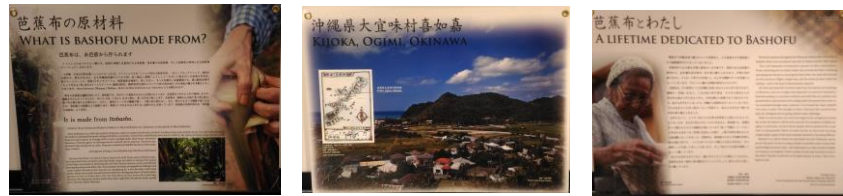
イベントの最終日の 9 月 22 日に、おきぎんふるさと振興基金にご支援いただき、芭蕉布産地の抱える現状についてのシンポジウム「ここからの芭蕉布、これからの芭蕉布」を開催した(図 1 右)。これまでに芭蕉布の歴史や美術工芸的価値についての展示はあるものの、減産している芭蕉布の産地の抱える問題について、一般に啓蒙する機会はなかった。今回、初めてこのような機会を設けたところ、那覇空港から 50 km も離れた OIST での開催にもかかわらず、県内外から 130 人の参加者があった。

図 1 左：「芭蕉布の科学」 イベントポスター 右：シンポジウムのプログラム

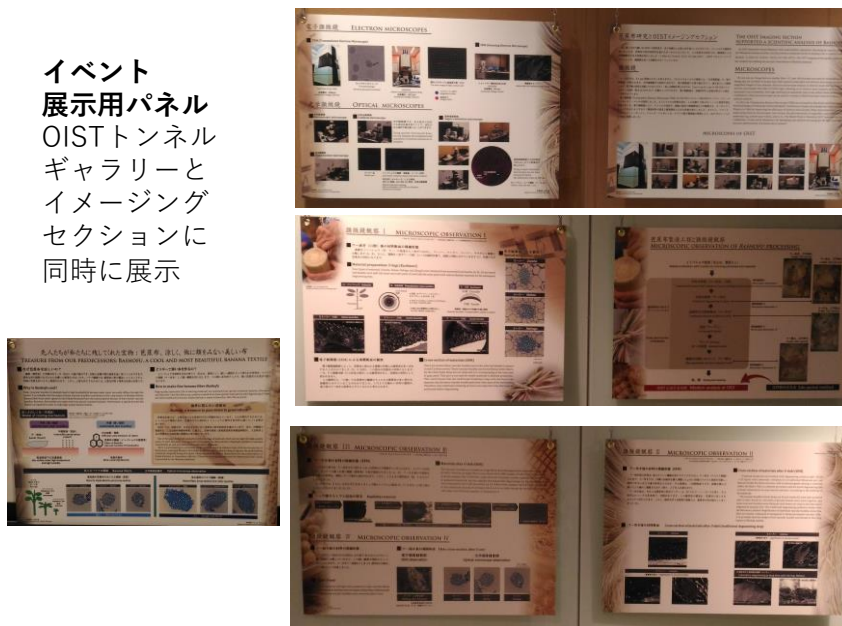


「芭蕉布の科学」展示パネルと OIST トンネルギャラリーの展示の様子

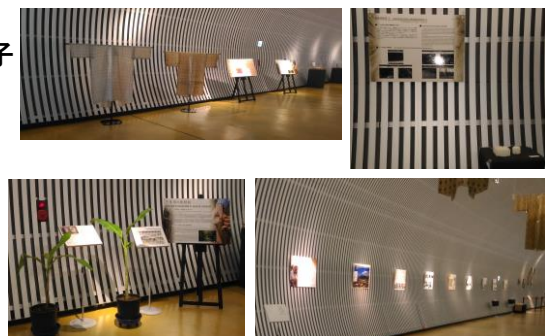
イベント
展示用パネル
OISTトンネル
ギャラリーに展示



イベント
展示用パネル
OISTトンネル
ギャラリーと
イメージング
セクションに
同時に展示

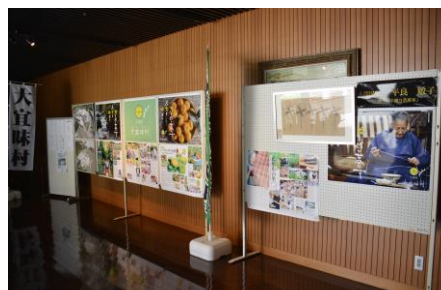


OISTトンネル
ギャラリー展示の様子
上記パネルと、
喜如嘉芭蕉布事業
協同組合や
沖縄県立博物館・
美術館の所蔵品、
琉球大学提供の
イトバショウを
展示した。



シンポジウム当日は、芭蕉布の里の大宜味村がブースを出展し、写真1の大宜味村紹介の展示に加え、特産品の「シークワサー酢」をふるまった。また、同日午後にはOIST イメージングセクションの協力による電子顕微鏡ツアーと、喜如嘉芭蕉布事業協同組合による芭蕉糸採りの体験型ワークショップ（事前予約制）も行った。これらは、いずれも盛況であった。

写真1 大宜味村紹介の展示



2、シンポジウム「ここからの芭蕉布、これからの芭蕉布」の講演内容

以下に、シンポジウムの講演者6名（写真2）による各講演の概要を、発表順にまとめる。講演は、OIST 副学長バリー・ホワイトの開会挨拶（日本語通訳付き）に続いて行われた。シンポジウムの司会進行は野村が担当し、短い休憩をはさみ3講演ずつ行い、講演終了後に短い質疑応答を行った（1ページ図1右）。また、シンポジウム当日の会場運営や特別企画の進行には、OIST 地域連携セクションに加えて、OIST 沖縄伝統工芸染織クラブの6名のボランティアにより行われた。十分なスタッフの人数確保と事前準備の結果、当日の運営は非常にスムーズであった。

写真2 講演者の先生方と沖縄科学技術大学院大学副学長ホワイト
左から諏訪、宜保、小町谷、與那嶺、平良、村井、ホワイト（敬称略）



①全国古代織連絡会 村井龍彦先生（写真3）：講演タイトル「日本の自然布とその未来への展望」（基調講演）

日本には多くの種類の自然布（古代布）があり、良く知られている麻などのほかに、北海道のオヒョウ（ニレ科の高木）や沖縄のバナナの自然布（芭蕉布）などが、古くから用いられてきた。講演ではまずその全容を概説していただいた。その後、村井先生のご専門の葛布については、特にその詳細をご紹介いただいた。

自然布の生産方法も、アルカリ精練や微生物によるものなど様々であるが、葛布は芭蕉布とは全く異なる生産方法、すなわち枯草菌を使う生産方法であった。さらに、現代にいたる葛布

写真3 基調講演される村井龍彦先生



の歴史などについてもお話いただいた。今日では、葛布は衣類だけではなく、高級壁紙などインテリア材料にも使われているとのことであった。

一般に綿などに比べて硬いといわれる古代布の利用について、興味深いお話を伺えた。また、自然布は天然の素材であり、ヒトや環境にやさしく、人体への負荷が低いことも自然布の利点であることもお話された。

②喜如嘉芭蕉布事業協同組合 平良美恵子先生：講演タイトル「芭蕉布産地の現状」
芭蕉布の歴史や、大宜味村喜如嘉で行われている江戸時代から変わらない製造方法と、生産の現状についてご紹介いただいた。生産については、戦後の最盛期に比べて、現在 1/6 程度に落ちこんでおり、また生産現場の高齢化などの問題についても触れられた。これまで平良敏子先生の復興させた芭蕉布の美しさのみが注目されてきたが、今日の生産現場の窮状についてもよくわかる講演であった。

講演者の平良美恵子先生には、同日午後の糸採り体験の陣頭指揮にもあたっていただき、喜如嘉芭蕉布事業協同組合の職人の方たちと一緒に、参加者のご指導にあたっていただいた。

③沖縄県立博物館・美術館 与那嶺一子先生：講演タイトル「琉球の文化遺産復元プロジェクト」

現在、沖縄県立博物館・美術館では様々な琉球文化遺産の保存・復元を進めているが、今回は布の復元についてお話いただいた。特に今回、無形文化（伝統技術）の復元や保護の難しさについてご教授いただいた。芭蕉布に限らず、幻の刺繍といわれている琉球刺繍の紹介など、現在取り組まれている内容についてもご講演いただいた。琉球刺繍が日本の本土にはみられない技法であることなど、琉球の布文化が、本土由来ではなく大陸由来であることなど、大変に興味深いものであった。琉球の伝統技術を維持していく意義について考えさせられる、大変貴重なご講演であった。

与那嶺先生のご講演の後に、短い休憩をはさみ、後半の講演に移った。この休憩中、参加者の皆さんは、大宜味村のブースや、芭蕉布の着物（製作：喜如嘉芭蕉布事業協同組合）など展示品の鑑賞を楽しまれた。

④名古屋女子大学 家政学部 小町谷寿子先生：講演タイトル「産学行政連携による尾州毛織物製作プロジェクト」

愛知県は毛織物の産地として有名であるが、地元の大学生と行政、生産者が連携して毛織物の布を糸から考え、服（紳士物のスーツ）にしていく過程を丁寧に紹介していただいた。ご講演では動画を使った紹介もあり、とてもわかりやすかった。このプロジェクトの成功には困難もあったかと思われるが、地元の女子大生と生産者（職人）が信頼関係を築き、スーツを作り上げていく様子は本当に興味深かった。このような学生参加型で実際に物を作り出す取り組みは芭蕉布の生産ではみられず、後日、聴講していた大宜味村役場の方から、大変参考になったとの感想をいただいた。

このシンポジウムの後に、小町谷先生は大学でご担当されている被服学科の授業に、芭蕉布や葛布など日本の自然布の内容を早速に取り入れて下さり、教育現場に生かして下さい。この芭蕉布イベント展示の概要をまとめたパンフレットなどの

資料も、教材に使われていると伺っている。本土でも芭蕉布や日本の自然布に関心を持ってくれる若者が増えることを期待する。

⑤沖縄県商工労働部ものづくり振興課 宜保秀一先生：講演タイトル「沖縄県の実施する工芸品原材料確保事業」

平成 29 年度から開始した、沖縄県が牽引する伝統工芸品原材料の確保事業についての概要をご説明いただいた。芭蕉布だけではなく、同じく植物を原材料とする琉球藍もその生産が激減している。芭蕉布の原材料のイトバショウと琉球藍について、県の取り組んでいる内容について具体的にお話いただいた。その中で大学（琉球大学や OIST）のポテンシャルを活用しようとしていることは、画期的である。

⑥琉球大学 農学部 諏訪竜一先生：講演タイトル「沖縄県で栽培可能な将来有望な作物の紹介」

諏訪先生が大宜味村の畑などで、実際に栽培されている作物について、ご紹介いただいた。上記⑤の沖縄県の事業の重要な計画でもある、大宜味村でのイトバショウ栽培の紹介に留まらず、メラルーカ（ティーツリーオイルの原料植物）や沖縄のシナモンと呼ばれるカラギ（オキナワニッケイ）の栽培についてもご紹介いただいた。諏訪先生が大宜味村で栽培されたメラルーカを原材料とする、琉大ブランドのティーツリーオイルの実物もお持ちいただき、参加者も手に取ってみる事ができた。芭蕉布の減産という、ややもすれば深刻になりがちなテーマの中、諏訪先生の軽快なトークで会場は非常になごやかな雰囲気終了した。

**写真 4 大宜味村
宮城功光村長の
閉会のご挨拶**



全ての講演終了後に琉球大学教育学部松本由香先生（ご来賓）から、伝統織物の職人と教育の現場の連携の難しさについてのコメントをいただいた。これは今後の子供（若者）への、芭蕉布についての啓蒙を考えるときに重要なご意見であった。

質疑応答では、参加者から伝統的な栽培方法は科学的に意義があるかなどの質問があり、現在これについては鋭意検討を進めているところである、と平良先生、諏訪先生が回答された。また、與那嶺先生の牽引する、琉球の文化遺産復元プロジェクトに対する、シンポジウム参加者の強い期待も感じられた。

そして閉会の言葉として、大宜味村長（ご来賓）からご挨拶をいただいた（写真 4）。

なお、シンポジウムは全て録画し、OIST 沖縄伝統工芸染織クラブ事務局で保管している。教育目的など、必要であればいつでも開示できる状態にある。

シンポジウム終了後の有識者懇談会では、上記講演者の先生方、松本先生、そのほかに日本女子大学家政学部被服学科の先生方、大宜味村役場から宮城村長はじめ数名が参加され、参加した OIST 関係者も貴重なご意見をいただくことができた。この懇談会には、芭蕉布の原材料がバナナの種類であることから、OIST のカフェ「グラノー」の特性「バナナ尽くし弁当」（瀬在丸学シェフが考案）を提供し、こちらでも好評いただいた。

3、シンポジウムを終了して

①反省点

以上 2 に記載した内容がシンポジウムの全容であるが、残念であったこととして、シンポジウムの時間が限られており、質疑応答を途中で打ち切らざるを得なかったこと（シンポジウム後も講演者と参加者の方が 20 分ほど、非公式に意見交換されていたが、それでも時間が足りなかった）が挙げられる。

もう 1 点は、各講演（日本語）の際に英語の通訳が設置できなかったことである。実際に数名の OIST の外国人から問い合わせがあり、今回、通訳設置が可能であれば、外国人の参加者もあったように考えられる。開催者の予想以上に興味を持ってくださった方が多く、今後、このようなシンポジウムを開催する場合には、この 2 点に配慮したものにしたい。

②波及効果など

全く異なる分野の先生方に講演していただいたにもかかわらず、芭蕉布を中心とした面白い内容であったとの感想も聞こえており、上記 2 点以外は、Facebook など SNS での感想を読む限り、シンポジウムについては好評いただいたようである。

このシンポジウムで芭蕉布に興味を持って下さり、後日行われた芭蕉布に関する講演（平成 30 年 10 月 12 日、ジュンク堂那覇店、OIST サイエンストーク、野村が講演）に、本土からいらして下さった方もあった。さらに「OIST サイエンスフェスタ 2018」（平成 30 年 11 月 17 日）でも、芭蕉布に関するトーク（サイエンスカフェ、野村が講演）と上記のパネルを再度展示したところ、うるま市在住の方からイトバショウのサンプルをご提供いただいた。これも、9 月のイベントで興味を持っていただいたことがきっかけとのことであった。このように、地元への効果も確認できた。また、先述したように小町谷先生が、芭蕉布など古代布に関する内容を授業に採用されたことなどから、今回のシンポジウムの波及効果が得られたものと考えられる。

最後に、シンポジウムを含むこの芭蕉布のイベントは、メディア（新聞やテレビ）でも取り上げられたので、次ページにまとめて添付する。また日本民藝館や県外の大学などがポスター掲載をして下さった。いずれも好意的に取り上げて下さったことを特記したい。

謝辞：おきぎんふるさと振興基金のご援助により、シンポジウムをはじめ、一連のイベントは本当に成功裡に終わりました。ここに関係者一同より、心よりの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

このイベントに関連する報道

平成 30 年 8 月 30 日に沖縄科学技術大学院大学で行われたオープニングセレモニーの様子やシンポジウムが報道された。

新聞記事の他に、NHK 沖縄放送局「おはよう沖縄」平成 30 年 9 月 4 日、QAB 琉球朝日放送 「カメラマンリポート」10 月 2 日（大宜味村喜如嘉の先人の知恵）でも紹介された。



新聞記事 1 沖縄タイムス
平成 30 年 9 月 4 日



新聞記事 2 琉球新報
平成 30 年 9 月 19 日 →

新聞記事 3 世界日報 平成 30 年 9 月 26 日

